「お魚料理甲子園大会の開催」

1. 目標

1）若年層からの魚食への興味の浸透

2）全国の一般市民への、水産海洋都市（産地）からの魚食普及の新しい切り口の発信による、産地のイメージアップ

3）産地市民が一丸となって、全国に発信できるイベントを行うことによる市民のベクトルを一つにする市の活性化

2. 提案内容

全国の高校生、高等専門学校学生のチームによる魚料理のコンテスト。

3. 具体の実施内容

1）全国の高校生、高等専門学校学生らのチームによる、魚料理オリジナルレシピの公募。書類と写真による選考で10チーム程度を選ぶ。

2）選ばれたチームを開催地の産地に招待。10日間の「試合」が始まる。

3）「試合」は産地にて、各チームが、町で得られる食材（メインは魚、しかしそれにこだわらない）を用いたオリジナル料理を２品目を創作。

4）第一品目で予選。4チームが残り、第二品目で優勝、準優勝、3位（2チームを決定する。

5）「試合」の様子

・学生たちが食材を町のみなさんに聞きながら探していく。これは産地の探訪とふるさと自慢の紹介になる

・料理を考えて行く過程を TV 局が追いかけ、後に「お魚料理甲子園ドキュメント」として放映する。

4. 本事業の特徴など

魚食普及の（子供）料理コンテストは、（社）大日本水産会も実施しているが、ほとんど全国の人が知らない状態である。「点」の事業でしかなく、全国的な魚食普及には、ただこの「点」を増やす他はない状況にある。

本事業の特徴は：

１）料理の「甲子園」として風物詩とする（ほかに、高知の「まんが甲子園」などがある）。

２）TV マスコミとの連携で、ロボコンのような盛り上がりを演出する。

３）単に料理のレシピを出すのではなく、（他所の）若者が産地の町を探訪し、町の人達と交流をしながら、一つのメニューを考えて行くプロセスを重要視する。これをメディアの力をかりて追いかけながら、知名度の向上をはかる。

４）案内役パーソナリティに、（私の所属する）東京海洋大学社会連携推進共同研究センターの客員准教授の「さかなくん」を活用することも想定できる。

５．課題

＜開催地をどうするのか＞

・高知のまんが甲子園のように、一箇所に固定すると、当該の地域振興にだけ結びついてしまうような恐れもある。一方で、事業そのものの定着のためには、一箇所に固定する方がより効果がある。

・主立った産地の持ち回りとする。例えば、全国4箇所を選定すれば、4年に一回回ってくる、これもある意味風物詩としては面白い効果がある。一方、この選定に漏れた地域には、(魚食普及の効果以外に)ありがたみがない。

・全国津々浦々、国体のように巡回する。平等とはなるが、なかなか我が町に回ってこない不満が有り、定着度が気になる。この場合は、開催を年に回や季節ごととするなどの手当ては必要かと思われる。

＜開催費、運営費＞

開催費用の調達は、当地の寄付によることと、メディア放映料に頼る他、何らかの手立てが必要か。そのためにも、実行に必要な費用を見積もる必要がある。

以上